

ジェームズ・ティソ作《パリの女》シリーズ（1883～1885年）
—油彩画と版画（リトグラフ/エッチング）の双方向的関係—

吉田紀子（学習院大学）

パリ・コミューン崩壊後、1871年にロンドンへ移住したジェームズ・ティソ（1836～1902年）は当地において現代的主題を扱う風俗画家として成功を収めるが、1882年には帰国し、翌1883年から1885年にかけて15点の大型油彩画から成る《パリの女》シリーズ（全作品、縦約145×横約100cmの寸法）を完成させた。何気ないエピソードを主題にアカデミックな手法で女性ファッションや室内調度品を丹念に描き出す画風は、パリ画壇への復帰をかけたと言われる本シリーズにも引き継がれ、同時代の文化や流行に対する画家の強い関心と観察力が反映されている。これまでティソ研究の主眼はロンドン時代の画業へ向けられる傾向にあり、先行研究では帰国直後のこの大規模な取り組みに関して、画業全体の中での位置付けを探るといった体系的な考察は試みられていない。しかしながら、油彩画を当初より全版画化することを構想していた点に注目するならば、本シリーズは油彩画とその版画化という手順に対する画家の認識を総括する重要な側面を含むものと考えられるのではないだろうか。こうした問題提起は、写真技術利用も含め、近年、関心が高まる19世紀後半の絵画と複製技術の複雑な関係を解きほぐす一助ともなるであろう。

本発表では、油彩画《パリの女》シリーズとその版画作品を不可分のものとして捉え、それらを通覧した上で、シリーズの企画意図、作画過程、さらには最終的に不評に終わった公開後の展開とその理由について検証する。1885年の油彩画初公開時の展覧会目録、わずかに存在が確認されているティソの書簡、関係画廊の帳簿記録といった一次資料に加えて、1880年代前半にパリとロンドンで同時刊行されていた服飾雑誌・生活文化雑誌を新資料として用いる。

ティソはすでに1860年頃から銅版画（エッチング）を手掛けていたが、ロンドン時代後半にはもっぱら自らの油彩画に基づく複製版画を制作するようになっていた。油彩画の精緻な描き写しという性格が強い版画の販売は、彼の大きな収入源になっていたとも言われる。その後、1885年にパリ、1886年にロンドンで公開された《パリの女》シリーズでは、油彩画公開時に版画の予約購買が一斉募集されるという一層組織的な段階が踏まれた。またそもそも本シリーズの油彩画自体が、雑誌挿絵等の当時の一般向け商業版画（リトグラフ）をイメージ・ソースとしている可能性が高く、これらの事実からは、観衆層の期待をすくい上げながら、一般商業用リトグラフを下敷きにタブローの要件を伴って構成した自らの油彩画作品を、今度は美術愛好家向けにエッチング化するという、ティソ独特の制作姿勢が見て取れるのである。本発表を通じて、フランス帰国直後のけっして平坦ではなかったティソの仕事ぶりをうかがうと共に、彼の作画において油彩画と版画（リトグラフ/エッチング）が結んでいたこうした双方向的な関係について明らかにしていきたい。